

ローマ人への手紙 #45 「福音の宣教」 10:14～10:21

2024/7/14

はじめに

パウロは9章からの議論で、イスラエルは神から種々の特権をいただいた選民であるのに、何故メシアであるイエスを頑なに拒否しているのか。この疑問に答えています。パウロは、まずこれは神のご計画であると述べました。つまり、神の主権によって、いつの時代もイスラエルには残りの者（レムナント）と呼ばれる少数の選ばれた人しか、真の信仰者はいませんでした。これは神が彼らを不信仰で頑なにしたのではなく、彼らの選択によることです。神はイスラエルの頑なさを用いて、救いの計画を前進させておられるのです。

10章に入り、パウロはイスラエルがイエスを拒否するのは神の主権だけではなく、彼らの責任でもあることを明らかにします。ユダヤ人は、確かに「神に対して熱心」でしたが、その熱心さは正しい知識によるものではありませんでした。イスラエルの無知は「神の義を知らない」ことです。

イスラエルは、神が義とされる方法を誤解していました。彼らは律法を誤用し、律法を行うことで救われる（神に義とされる）と信じていました。しかし律法を完全に行うことは不可能です。神がイスラエルに律法を与えられた目的は、自らの罪深さを知り、救い主メシアへと導かれるためです。

「神の義を知らない」というボタンの掛け違いが、さらに次の掛け違いを生みました。第一の誤解は、「救われるのはユダヤ人だけである」という誤解です。第二の誤解は「異邦人に伝道する必要はない」という誤解です。先回は第一の誤解「救われるのはユダヤ人だけである」について学びました。

神が人を義としてくださる、つまり救われる方法に関しては、ユダヤ人と異邦人の区別ありません。ユダヤ人であれ異邦人であれ、ただ一つです。

ヨハネ 14：6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

救い主メシアである御子イエスキリストが、罪の身代わりとなって十字架で死んでくださ

り、葬られ、三日目に罪と死に完全勝利してよみがえってくださった。この神の恵みを、信じる信仰によって私たちは救われます。9 - 10 節でパウロは信仰の表し方について記しています。

ロ-マ 10:9-10 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。今回は、ユダヤ人の第2の誤解を取り上げます。

1. 宣教の必要性

ユダヤ人たちは、ユダヤ人しか救われないのだから、異邦人への伝道は必要ないと考えていました。その例を旧約聖書と新約聖書から二つ挙げておきます

旧約聖書の預言者ヨナの場合も異邦人伝道（ニネベでの宣教） に対しては強い抵抗感を持っていました。旧約聖書において、異邦人に伝道することを命じられた預言者はヨナだけです。神はヨナに敵国アッシリアの大都ニネベに行って悔い改めるように叫べと語られました。

ヨナはこの神の命令に反発します。なぜ敵国の無割礼の者に悔い改めを叫ばなければいけないのか。ニネベの者たちは滅びるべきで救われるべきではない。私は嫌だと、彼はニネベとは反対方向の、ヤッフアという港町から船に乗ってタルシュシュ（スペイン）に逃げます。その海上で嵐が起こり、難破しそうになります。ヨナが神の命令に逆らったせいで嵐が起こっていることが判明し、船員たちはヨナを海に放り出しました。そこに神は大きな魚を備えて、ヨナを飲み込ませました。

ヨナは3日3晩を魚の腹の中で過ごすことになります。そしてついに魚の中で「誓いを果たします」と悔い改めます。神は魚に命じて、ヨナを陸地に吐き出させました。ヨナはニネベに行き、「40日後にニネベは滅びる」と都中を叫んで回りました。そうするとニネベの王と大臣たちは、全住民に命じて人も家畜も断食して荒布をまとい、悪の道から立ち返るように布告を出し、ニネベ中が悔い改めたのです。主はこれをご覧になり、ニネベを滅ぼすことを止められました。

ところがヨナはこれを見て納得がいきません。彼はニネベが悔い改めずに神の手によって滅んで欲しかったのです。そんなヨナに神は語られます「私はこの大きな都を惜しみ憐れまないでおられようか、この街には右も左もわからない12万人の人間と家畜がいるではないか。」このヨナ書には、神は右も左もわからない異邦人の神でもあり、深くあわれみ

救いたいと願っておられることがよくわかります。

新約聖書の例を挙げます。初代教会のユダヤ人信者たちも、異邦人の救いに関しては懐疑的でした。イエスの弟子たちは、最初全てユダヤ人でした。弟子たちでさえ、当初異邦人の救いは眼中にありませんでした。イエスは、昇天される前に大宣教命令を残されます。そこでは「あなた方は行って、あらゆる国の人を弟子としなさい」と言われていますが、弟子たちはあらゆる国にいるユダヤ人たちに伝道することを考えていたのではないのでしょうか。しかし使徒の働きで記されているように、徐々に神の導きと啓示によって弟子たちの考えは変化していきます。

弟子のリーダーであったペテロも最初は、異邦人への伝道の必要性を感じていませんでした。ペテロがヤッファの皮なめし職人のシモンという人の家に滞在した時、ペテロは祈るために屋上に上り、そこで夢心地になって幻を見ました。その幻は、天から大きな敷布のようなものが降りてきて、その中にはあらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥が入っていました。神はペテロに屠って食べるように言われます。ペテロは答えました、私は律法が禁じている汚れたものを一度も食べたことはありません。すると神は言われました。「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」これが三度起こります。

この幻から覚めたペテロのもとに、ローマの百人隊長のコルネリウスという人から使いがやってきました。すると聖霊がペテロにこの人たちと一緒にいきないと促されました。道すがらペテロが「どんなご用でおいでになったのですか」と尋ねると、御使いがペテロという人を招いて話を聞くようにと主人コルネリウスに現れたとの返事です。

ペテロはコルネリオの家を招かれ、福音を宣べ伝えました。すると家にいる福音を聞いた人たちに聖霊が降り、彼らは異言を語り、神を賛美し始めたのです。ペテロはこの時、屋上で見た幻の意図を理解しました。神はどんな国の人のもきよくない者だとか、汚れたものだとか言うてはならないということ。イエスはすべての人の主であり、えこひいきされる神ではないことを。ここから異邦人への伝道の扉が開かれ、世界中に福音が広がり始まりました。

10:14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。

10:15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

パウロは、修辭的質問の鎖を畳みかけています。①信じたことのない方を呼び求めることはできない。②聞いたことのない方を信じることはできない。③宣べ伝える人がいなくて聞くことができない。④遣わされなくては宣べ伝えることができない。

13～15節の動詞を、逆に並べてみると、宣教の順序が分かります。遣わされる→宣べ伝える→聞く→信じる→呼び求める→救われる。これは、私たちが救われた順序でもあります。

10:17 そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

伝道しなければ人が救われることはありません。神はすでに救われた私たちクリスチャン遣わしておられます、私たちが伝えるキリストについてのみことばを（口頭でも、文章でも、インターネットでも）聞いた人たちに、聖霊が働いてくださり、信じる方が起こり、信じた人が神に救いを求めて、救われるのです。

「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」これはイザヤ書 52:7 が引用されています。イザヤ書ではバビロン捕囚からの解放を伝える使者について描かれています。バビロン捕囚からの解放の知らせは、心躍る喜ばしい知らせでした。一刻も早く届けたい知らせです。パウロはこれを福音を伝える使者に適応しています。戦争に負け、バビロンに奴隷として連行されていた民の解放を、私たち罪の奴隷であったものがキリストによって解放されて、神の御もとに連れ戻されることに当てはめているのです。

「足」は、その人物全体を指さす象徴的な言葉です。救われた者が伝道しないなら、次に救われる者は起こされません。聞いたことのない方を信じることなどできないからです。神は、私たちの伝道を通して他の人々を救うことに決めておられます。パウロをはじめとする弟子たちは、このよき知らせ福音を喜んで命がけで伝えました。

2. ユダヤ人は聞いていなかったのか

パウロは、ユダヤ人たちを弁護する質問が読者の間から上がることを想定しています。

① ユダヤ人たちは、福音を聞く機会がなかったのではないか。②聞いていたとしても、理解ができなかったのではないか。それに対する回答が、16～21節に出てきます。

10:16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。

これはユダヤ人のことを言っています。「しかし、すべての人が福音に従ったではありません

せん。」とは、福音を信じたユダヤ人は非常に少ないということを婉曲表現しています。
(イザ 53：1 参照)。イエスの公生涯の間も、パウロの時代も、信じた者は少数でした。

ヨハネ 12:37-38 イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。

10:18 でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」

ユダヤ人は聞いていなかったのでしょうか、いや聞いていました。ユダヤ人たちは、一般啓示も特別啓示も、確かに聞いていたのです。パウロがこの手紙を書いた頃には、離散の地のユダヤ人にも福音は伝えられていました。

3. ユダヤ人は理解できなかったのか

10:19 でも、私はこう言いましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」

イスラエルは聞いていただけでなく、理解できたはずです。「モーセが言っている」とは、申命記 32：21 の引用です。「民でない者」、「無知な国民」とは、異邦人のことです。律法を持たない異邦人でも信じているのだから、イスラエルに理解できないはずがないというのがパウロの論理です。これは、大から小の議論です。

10:20 またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現した。」

「イザヤが言っている」とは、イザヤ書 65：1 からの引用です。ユダヤ人が心を頑なにしたので、神は異邦人にご自身を現されました。

10:21 またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」

これは、イザヤ書 65：2 の引用です。神はイスラエルを見捨てておられません。そして今も、イスラエルが立ち返るのを待っておられます。聖書を貫いている契約は、アブラハム

契約です。この契約は無条件契約です。イスラエルは今イエスを拒否し続けていますが、必ず回復の時がやってきます。なぜなら神は契約を守られる神だからです。神と私たち異邦人クリスチャンとの契約である新しい契約も無条件契約です。神が契約を守られる神であるからこそ、私たちは一度救われたら救いを失うことがないことを確信できるのです。

おわりに

全ての人を救う福音は、全ての人に伝えられてこそ意味があります。キリスト教は本質的に「伝えられる」宗教です。それは福音ですから、決して強要したり、無理やり信じさせたりしてはなりません。それでもひたすら喜びをもって伝えるのです。

私たちの教会も、このように神から遣わされた宣教師の働きから始まっています。ケネディ先生夫妻やハリデイ先生が、イギリス・オーストラリアから神に召され遣わされてこられました。異国の地で、彼らは慣れない日本語で福音を宣べ伝えてくださいました。西海栄悦牧師は40年の牧会を通して福音を語り、教え続けてくださいました。福音を聞いた人、トラクトを読んだ人の中に信じる人々が起こり、信じた人々は神に呼び求め、救われてきたのです。使徒の時代から二千年受け継がれてきた、このよき知らせを私たちが止めてしまってはなりません。

全ての人を愛してやまない方が、この世界の王となられた。その方が私の人生を変えてくださったように、あなたの人生もきっと喜びへと変えられます。多くの困難があることでしょう。しかし、福音宣教の働きは、宣教者たちの足は、たといホコりにまみれ、傷ついていたとしても美しいのです。救いの喜びを運ぶ足だからです。

しかし、残念ながら全ての人が福音を信じて従うわけではありません。そのことは初めから預言されていました。それにもかかわらず、主が世界の果てまで伝え続けるようにと命じになるがゆえに伝える。それが宣教の働きです。それは、神は本気で人を救おうとしておられるからです。そもそもいい加減な思いで、ご自分のひとり子を犠牲にするなどできるでしょうか。不従順で反抗する民に対してさえ、終日手を差し伸べられたお方です。まして、右も左も分からない人々に主は今日も御手を伸ばし続けておられます。その神の忍耐、神の誠実さ、神の愛こそが福音宣教の根拠です。